

中仙道六十九次「てくてく旅」(No2) 一木曾路編一

本 部 北 沢 三 明

今回は、9月2日から12月20日に涉って歩いた木曾路を中心に書いて見ました。

塩尻宿「7km」を起点として、洗馬宿「3.5km」本山宿「8km」贅川宿「7km」奈良井宿「5km」蕨原宿「8km」宮ノ越宿「7km」福島宿「10km」上松宿「13km」須原宿「7km」野尻宿「10km」三留野宿「6km」妻籠宿「8km」馬籠宿に至る約100km程の旅でした。

中仙道木曾路は11宿22里と言われており、木曾川に沿って険しい峠を越え、深い谷を這うようにして伸びております。

今回の旅の中で印象に残った幾つかの場所を書いてみます。

江戸時代、参勤交代の大名行列や商人、旅人など中仙道を行き来する人々は必



ず関所を通りました。

木曾福島関所は、江戸幕府が江戸防衛のために五街道の各所に張りめぐらした50箇所にも及ぶ関所の内でも、東海道の箱根、荒居や中仙道の碓氷などと並び、天下の四大関所の一つといわれています。有事の際には関所を封鎖し江戸を守る為に、木曾川を望む険しく狭い断崖に設けられていました。

江戸時代、関所を通るには手形や証文が必要でした。

幕府が江戸に在る諸大名の妻子の脱出を監視する為に使われたのが関所女手形です。

贅川宿にある贅川の関所には、女改めの様子が絵になって残っていました・・・想像にお任せします。

当時の最新兵器であった鉄砲も証文が必要で、江戸へ向かうものは「入り鉄砲」といわれ特に厳重であったと言われていました。

寝覚ノ床。この不思議な名は、晩年をこの地で過ごした浦島太郎の伝説に由来するものといわれています。諸国をさまよった浦島太郎は上松の里が気に入って住み着き、毎日寝覚ノ床で好きな釣りを楽しんだと言われております。白々とした大岩・奇岩が並び、その底には翠緑の水をたたえる木曾の名勝地を見ることが出来ます。当日は雪になり霞がかかってしまいました。

木曾路最後の宿場が馬籠宿で、木曾路でもっとも有名な宿場です。

馬籠宿は急峻な坂の宿。街道が山の尾根に沿っている為、昔から水の確保に苦労したと

いう。江戸から明治まで5回の大火により、江戸期の建物はすべて消失し、現在ある建造物は昭和三十年代以降に修復されたもの。

馬籠は、最高品質の木材、木曽五木「ヒノキ、サワラ、アスナロ、コウヤマキ、ネズコ」の森林に周囲を囲まれた立地ゆえに、時代の圧政に翻弄された歴史を背負っている宿場です。豊臣時代から昭和の終戦まで住民を苦しめた「木曽山の掟」は、実に過酷なものだったようです。

まず、豊臣秀吉が鷹狩りに鷹の保護を目的に一定の区域を「巢山」として立ち入り禁止にした。そして、徳川時代には樹林の優れた場所を「留山」に指定し、木曽山地の大半に立ち入る事を禁じた。その取締りは幕府直轄地の威信をかけるほど厳しいもので、犯せば俗に「木一本首一つ、枝を落とせば腕を切る」と恐れられたほどの厳罰に処された。村人は所有地であっても、五木を切ることはできず、林業での生業は禁止され、貧困にあえいでいたという。そして明治政府となり、更にその他の区域「明山」の立ち入りを禁じた。その住民の恨みが、その後の島崎藤村の代表作「夜明け前」のテーマになっていると言われております。行楽シーズンには多くの観光客が訪れ、賑わいを見せますが、シーズンが過ぎていたので、土産店も閉鎖しておりました。

今回の木曽路歩きは、十日間の旅でしたが、歩きながら木曽谷の厳しい自然を体感し、また、その歴史をふり返る旅になりました。

今回は、美濃から近江、京都になります。では。(次号につづく)